



FIGU 特別公報



不定期刊行物

インターネット : <http://jp.figu.org>

E-メール : jp@figu.org

第9巻 第5号

2003年4月

特別公報の反響

特別公報は世界中で非常に大きい反響を呼んだ。そしてその結果、特別公報の続号に対する需要も生まれた。この要望には喜んで答えたいが、他の人々の意見もまさしく私の意見と同じように重視されるべきだ。語るべきことは非常に多くあろうが、最も重要と思われることだけが書かれるようにするために、残念ながらすべてを制限しなければならない。そこで私は今年3月19日に行った会見でクウェツァルが語ったことから始めようと思う。

ビリー

ビリー

よく分かった。イラクの差し迫っている戦争について尋ねたい。これに関する君の意見は？

クウェツァル

非公式には戦争は昨日3月18日16時に始まった。このとき米英軍がクウェートとイラクの間の非武装地帯に侵入したからだ。しかしこの地帯の彼方ではすでに爆弾とミサイルによってイラクの防御体制が破壊され、兵士が殺された。すでに昨日には本来の戦争が開始された。前述の地帯への侵入だけでも戦争行為にほかならないからだ。しかしアメリカ人はこれを否定し、翌日ミサイルでイラクの首都を攻撃したときに、ようやく戦争開始を正式に認めるだろう。それはヨーロッパ時間ではかなり正確に3時33分、イラク時間では約2時間ずれて5時33分であろう。その夜はバグダッドでさらに爆撃とミサイル攻撃が行われるであろう。それによって本来の総攻撃が引き起こされる。こうして米英の軍隊は非武装地帯からイラクとの国境を越えるが、最初は大きな反撃を受けることはないであろう。しかしそうした状況は、至るところで通常の戦争が本格的に、しかもゲリラ的に勃発すれば、急速に変化するであろう。イラクの軍隊と国民が必死の抵抗をするからである。それによって比類ない災害と戦争の経過が生じるであろう。それはこうしたすべてに関与する人間だけでなく、全世界にも真の破局をもたらすであろう。そしてまた戦争大国アメリカとイギリスに対する憎しみも世界中で途轍もなく強まるであろう。アメリカ人とイギリス人にとって戦争は茶番となり、全体として見れば全人類にとって屈辱となるであろう。なぜならば人類は、無力にもなすすべもなくアメリカ人とイギリス人の戦争犯罪を傍観せざるを得ず、それに対して何もなし得ないであろうからだ。残念ながらまだ地球人は、犯罪的な権力者を解任して追放するほど一致団結していない。というのも、彼らは今なお無意味な平和デモによって、戦争犯罪者で残忍な国家運営者に影響し得るかのような、誤った行為と信念に囚われているからだ。地球人が論理的に行動して、自分たちの罪ある支配者を解任して、本当に誠実な国民の代表と置き換えるようになるにはまだ程遠い。平和デモで声高く平和を訴えるだけでは無駄であるということは、古来から何ら変わらない。真の行為だけが意味を持つ。そしてそれは、すべての国民が地球上に本当の平和を生み出そうとする心情で一致団結することに基づくものだが、これは犯罪的な国民の代表を解任し、誠の人間と置き換えることによってしか達成できない。イラクで起きることについて言えば、残念ながら第一次湾岸戦争のときと同じく、サダム・フセインの命令によって無意味にも油田や油井が放火されるであろう。今回のイラク戦争は、それに先立ち地球上で諸国民の間で戦い抜かれた、そしてこれからも戦い抜

かれるすべての戦争と同じく、地球の人類にとってひどく途方もない敗北を意味する。原爆や、すでに第一次世界大戦で毒ガスの形で使用されたようなあらゆる他の大量破壊兵器が発明されて以来、地球人は戦争行為によってますますひどい敗北へと突き進んでいる。大量破壊兵器とは、核兵器と生物兵器と化学兵器だけを言うのではなく、ミサイル、爆弾、ビーム兵器および振動兵器もそうだ。これらは全部世界中のすべての国、すべてのテロリスト組織で禁止されているか、あるいは禁止されねばならない。

ビリー

それは真実の言葉だ。私としては、アメリカ大統領ブッシュとその軍勢、トニー・ブレアとその信奉者、そして日本、オーストラリア、スペイン、そして戦争に同調するすべての国々の所管の無責任な権力者たちは、あらゆる点においてオサマ・ビン・ラディン、アドルフ・ヒトラー、ヨセフ・スターリン、ミロシェビッチ、およびかつて地球上に存在し、あるいは現在地球上を徘徊し、あるいは将来同じことをしようとするあらゆるその他類似の輩と同列に扱われるべきだ。そして古来このかたすべての戦争犯罪者や人類への犯罪者がいつもそうであったように、このイラク戦争に何らかの形で関与する者はみな、たとえ些細なことであっても、イラク国民に対してのみならず全人類に対して犯罪を犯すことになるのだ。こうした事態全体は、もはや落ち着きすまして非難すべき国際法上の行為と呼ぶことはできず、全人類に対する途方もない犯罪と呼ばなければならない。たとえすべての関係国の政府の独善的で無分別な戦争犯罪者たちが、主観的には自分たちの行為や行動をすべて正しいと確信しているとしても、客観的には彼らがそのように行動する、つまりこの残忍な戦争を遂行する権利はない。すべては、かつてないほど地球の人類全体の運命に対する脅威を意味している。すべての関係者は、それが常にどのような種類のものであれ、自分たちの犯罪的な目標を達成するためだけのために、罪のない人間に対して人間として許されない攻撃を加え、その死を甘受させることに対して罪がある。全員が不安、妄想、狂信主義、臆病、人間蔑視、そして独善によって、彼らのそうした観念と妄想へと追い立てられているのだ。それゆえ、彼らは、自分の意見や利益に沿わないものはすべて消し去る。そしていったんその狂気が始まると、彼らは卑小で、あまりに臆病なために後戻りできないのだ。こうして彼らは自分たちをその行為と行動、妄想の独善、人間を蔑視した嘲笑、生命に対する無分別で良心のない思い上がり、そして自己神格化により、かつて地球上に存在した他のすべての重大犯罪者や人類への犯罪者と同列に置くのだ。

クウェツァル

君は以前そのうち何人かと会ったことがあるね。

ビリー

そう。たとえばサダム・フセイン、私はイラクで2人の影武者とともに彼と会った。だからこそ、なぜ彼の影武者が見破られないのか理解できない。というのも私が当時確認したところによると、サダム・フセインには歴然としたまぎれもない特徴があるからだ。それについてはすでに前に一度君に話したね。

クウェツァル

私は知らない。君からそのような説明を受けたことを思い出せない。それは一体どういうものか。

ビリー

私の誕生日である1989年2月3日に、我々は未来のことを話していた。そのとき第二次湾岸戦争や、したがってまた主戦論者ブッシュとサダム・フセインについても話題にした。それははっきり覚えている。なぜなら、私は今ちょうど当時の我々の会話に取り組んでいるところだからだ。サダム・フセインは、私の記

憶が正しければ、右目の下だったと思うが、そこに小さいほくろがあった。彼は興奮すると、このほくろと右目の回りの全部がびくびく動くのを私はこの目で見た。そのほくろは確かに当時からなくなっていない。だから今もそうであるし、それによって識別できるに違いない。

クウェツァル

私はそれを判定できない。私は彼を個人的に知らないし、そうしたことを確認したこともないからだ。

ビリー

もちろんだ。ところで、もし私が最終的にすべての宗教が消滅しなければ、あるいは宗教自体のもとで何らかの形で平和が生まれなければ、世界平和は決して存在しないだろう、と言ったら君は何と思うかね。とりわけキリスト教は馬鹿げている。一方でカトリックのローマ法王ヨハネ・パウロ2世がいて、想像上のキリスト教の神を引き合いに出して戦争に反対するかと思うと、他方ではアメリカ大統領ジョージ W. ブッシュが、同じキリスト教の神をより所にしているのだ。戦争扇動者であるこの最高司令官は、今自分を英雄と感じている。彼は知事職の間に150人以上の人間を死刑にしたが、プターが言ったことを正しく記憶しているとすれば、そのうち70人が無実だった。カロール・ウォジュティエーラ別名法王ヨハネ・パウロ2世は、彼が口にする宗教的な戯言を自分では信じていない、とんでもない偽善者だが、少なくともジョージ W. ブッシュのように飲んだくれではないと言っている。ブッシュは酔っ払いの狂気の中で神との回心体験をしたと称し、今や自らを「復活したキリスト」と公言してはばからない。だが、すべては意図的な「思い込み」にすぎず、国民をたぶらかし、権力を行使することを目的としたものだ。その一方で、彼はアメリカ大統領として謀報活動と戦争により、^{ちようほう} どうやらこれも全く「キリスト教」の愛から、軍隊やその他の殺し屋を外国に侵入させ、これらの国を併合し、そして何千、何百万という罪もない人々を殺させている。彼は自分が神の使者であり報復者であるという、自分で作り上げた狂気の中で、その帝国主義的な権力への狂気と馬鹿げた全能気取りを正当化するために、想像上のキリスト教の神を資格証明に乱用しているのだ。そうしたすべてのことにかかわらず本当はブッシュの場合、想像上のキリスト教の神と彼の回心体験は、自分の権力欲と復讐欲を生かしきるための、また自分がろくでなしから（アメリカ的な意味で）少しは役に立つ人間になったことをパパに証明するための、空虚で汚い口実にすぎない。彼の宗教的な偽善は法王のそれとも、サダム・フセインのそれとも同類だ。実際、サダム・フセインは根っから非宗教的な人間であり、かつて私にこう言ったことがある。自分の政治的な計画の実現に役立ち、それによって権力の座に就くことができ、それを維持できるならば、国民に見せかけるためだけにアラームの前にひざまづく。つまり敬虔なイスラム教徒を装うことは彼にとって、特に現在の第二次湾岸戦争では、敬虔で信心深いイスラム教徒を自称するサダム・フセインの打算では、全イスラム世界を憤激させ、それによって頭のいかれた信心ぶったアメリカ人ブッシュが始めた戦争が、イスラムに対する戦いと解釈されるようにするための見せかけであり、策略にすぎないのだ。

クウェツァル

君の言うことはすべて正しい。さらに付け加えると、ジョージ W. ブッシュは、アメリカ合衆国全体がサダム・フセインによって脅かされているという、分別ある人間にとっては明白な嘘の上にイラク戦争を築いた。それは、この地球上で人類が誕生して以来一度も見ただことのないほど、とんでもない規模の大嘘である。このずる賢く下劣なでっちあげによって、大部分のアメリカ国民だけでなく、他国のすべての権力者や同調者も欺まかれている。彼らは卑屈者のごとくブッシュにへつらい、大変な不安と臆病からその愛顧をへつらい求めている。しかしブッシュが彼らにその愛顧を与えるのは、彼らをもはや必要としなくなるか、あるいは彼ら自身を敵と宣告して戦争を仕掛けるまでの間にすぎない。サダム・フセインに由来すると称する危険

というこの大嘘によって、アメリカとイギリスの侵略戦争が正当化され、これからも正当化されることだろう。が、それは他のすべての戦争と同じく、あらゆる国際法、あらゆるモラル、あらゆる人間の尊厳、そして個人々の生命に対する権利に違反している。アメリカもイギリスも、その他いかなる国にも、独裁者やその他の暴君を戦争行為によってその権力の座から駆逐する権利および合法的な根拠は持っていない。持っていないにもかかわらず、そのようなことをする者は、疑う余地無く本人自身が国家運営の職務にはふさわしくない暴君であり、独裁者であり、テロリストなのだ。実際、戦争が政治的または宗教的な問題や紛争などを解決するための手段であった試しは決してない。そうした種類の問題や紛争は、判断力、理解力、知恵、そして愛によってのみ克服できる。たとえ強制的非暴力を用いなければならぬとしてもである。これは、たとえば国民が、役立たずで、無責任で、残忍で、良心を欠いた独善的な権力者を、団結した力で解任して、もはやいかなる権力も行使できない所へ終身追放し監視下に置くことを意味する。これはサダム・フセインに対して取るべき道でもあったろう。しかしまたそれはアメリカの権力者ブッシュ、イギリス首相ブレア、オサマ・ビン・ラディン、そしてみずからを神と思い込んでいる者に同調するすべての独善的で無責任な連中に対して取るべき道でもあったろう。

ビリー

友よ、君の語ることは全く私の意にかなっている。

暗躍する人類への犯罪者

ペルシャ湾で荒れ狂っている戦争を見ると、人間であることを恥じないわけにはいかない。というのも、そこで行われている残虐行為は、いかなる人間の尊厳をも欠いているからだ。そしてこのすべての災難に対する罪を負うのは、自分を全能と思い込んでいる無責任な独善者、無責任者、狂人、精神錯乱者、そして精神病質者およびパラノイアである。それらはアメリカとイギリスの国民の頂点に立つジョージ W. ブッシュとトニー・ブレアであり、顧問などと称してこれらに同調して吠える汚らわしい狼ども、たとえばライスや、パールや、ラムズフェルドやパウエルなどであり、さらに狼の群の中で臆病にも身を屈めて上級権力者の悪臭漂う尻にもぐり込んでいる、自陣や他の雑多な国々の卑屈者である。これら強大な権力を持ったスカンクどもは戦争、殺戮^{きつりく}および破壊によって自分たちの権限を逸脱し、国家元首として支配欲に駆られ独善的にも国民の意志を無視している。これら卑屈^{やから}な輩は国民に解任されて終身追放されねばならない。実際、最終的に国民が団結して戦争犯罪者であるブッシュ、ブレア、シャロン、アラファト、サダム・フセイン、その他すべての者たちを解任して終身追放に送るとすれば、純然たる正当防衛の行為であろう。罪を犯し、テロを行い、戦争をけしかけて遂行し、復讐や報復を企て、憎しみの感情に身を委ね、そしてあまりの不安と臆病から死ぬほど恐れおびえているすべての連中は、国家権力者として国民の頂点に据えるにふさわしくない。なぜならば、たとえ国民によって「民主的」に選ばれたとしても、彼らは国民から雇われた暴君、テロリストおよび独裁者以外の何者でもなく、サダム・フセインやオサマ・ビン・ラディンのようなみずから選んだ独裁者やテロリストの親玉と何ら変わりがないからである。彼らは何の値打ちもなく、人間性のかけらも持ち合わせないほどに墮落している。ブッシュ、ブレア、シャロン、アラファトおよびその一味がやっていることは、サダム・フセインやオサマ・ビン・ラディンの残忍な策謀と何ら変わらない。違いは、犯罪的な政治屋たちは大統領などと呼ばれ、他方は独裁者やテロリストと呼ばれる点だけである。しかし全体として両者がやっていることに違いはなく、いずれも非人間的で、墮落し、破廉恥で、無責任で、戦争犯罪者であると同時に人類全体に対する犯罪者である。

多くの狂人、無分別者および脳無し野郎は、イラクの戦争に、したがってもちろんアメリカ人とイギリス

人に歓呼している。そしてこれらの狂人、無分別者、愚か者および脳無し野郎は、すべての物事の背後に真実を見ない連中でもある。それどころか彼らは、もし第二次大戦でアメリカ人がヨーロッパに入らなかったならスイスとヨーロッパおよびその国民は存在しなかったであろうと今でも主張する。これらの狂人たちは、ヨーロッパはアドルフ・ヒトラーの災厄から解放されはしたが、しかしそれはアメリカへの隷属に取って代わられただけであるという真実を見ない。すなわち本当はアメリカ人はヨーロッパを解放したのではなく、ドイツに永久に駐留して、全ヨーロッパを徐々に奪取しようと目論んだのだ。実際、将来そうなるだろう。ヨーロッパがそれに反抗でもしようものなら大変だ。現代に例を取るならば、もしドイツが湾岸戦争に一切関与しないと主張したら、アメリカはドイツに対して何をするだろうか。が、それだけにとどまらない。アメリカは全世界を奪い取り、支配しようとしているのだから。そしてまたそれは世界が最終的にアメリカの拡張欲に対してみずからを防衛し、すべてにストップを掛けなければ、いつの日か実現するだろう。アメリカは経済、言語、教育および技術の面で、すでにヨーロッパだけでなく、世界中に侵入している。しかし愚か者たちはこれに気付いていない。なぜならば、それができるためには彼らの知性は十分ではないからだ。あるいは彼らは見て見ない振りをしているか、アメリカを盲信するあまり彼らの理性や判断力は完全にくらんでいるのだ。これについてはスイスとその責任者を例に取り上げれば十分である。彼らはアメリカ人に対してスイスの領空を開放して、アメリカ軍、おそらくまたイギリス軍の患者輸送機にスイス領土の領空通過権を与えるのである。これについて、スイス政府が中立に関してどのような理解をしているのか疑問である。というのも戦争遂行国の航空機が、たとえ患者輸送機であってもスイス領土の上空を通過することは中立の侵害であることは疑いを容れないからである。しかも政府はこれについて問われもしないのに、スイス国民の頭越しに行動し、アメリカ人に領空通過権をお世話したのである。これについては全国民の占有権的に決定することが必要であろう。さらに、多くの目撃者が主張しているように、(もっとも政府の責任者とスイス空軍は否定しているが) アメリカとイギリスの戦闘機がスイス領空を轟音を立てて通過したということがいつか判明したなら、全く言語道断である。つまり政府と空軍は単に見ない振りをしたと推測せざるを得ないからだ。

ところで、上に述べたことだけではまだ足りない。というのも、スイス空軍によると、戦争遂行国、現在まさにアメリカとイギリスの戦闘機がスイス領空に侵入したら、武装していないジェット戦闘機で国境まで同伴するだけで、外国の飛行機を打ち落として確保し、乗組員を抑留することはしないと言うのである。これほど笑止千万なことはない。なぜなら、まさに現在の場合アメリカとイギリスは、愚かなスイス人のことを陰険にもひそかにほくそ笑み、いよいよもって汚らわしく非情な笑みを浮かべて彼らの爆撃機と戦闘機でスイス上空を通過しているからである。しかしスイスの責任者たちがそこまで考えていないのは全く明らかだ。他方、武装していないスイス空軍がスイスの領空で、大量の殺人兵器を積んだ戦闘機にいわば儀仗隊として同伴して、これらの戦闘機がイラクかどこかで罪のない人間の上に殺人的な積み荷を投下し、多くの残酷な死と苦しみと悲惨をもたらすことができるようにするというのとは一体どういうことか。責任あるスイス人は第二次世界大戦以後とても臆病になり、そして今日イギリスとアメリカの前で、まるで犬のようにクンクン鳴いて縮こまるというのか？ 私が第二次世界大戦中に体験したように、当時のフラップ(対空防衛)と空軍の勇敢なスイス兵士がフラップ砲と単発戦闘機で、スイスを何度も爆撃したアメリカの爆撃機と空中で必死に戦ったのを思い出すとき、今もしスイスが敵国から攻撃されたとき、スイス空軍と対空防衛が何をし、また何ができるのかと思うとぞっとする。

スイスは実に多くの事柄に関してアメリカ人の前で縮こまっている。一例として、経営者への裏切り者クリストフ・マイリの件を取り上げよう。彼は警備員としてUBS銀行に保管されていた書類を盗み出し、アメリカのもぐりの弁護士ファーガンの助けを借りて金儲けをたくらみ、アメリカに逃亡した。スイスの銀行、スイス・コンツェルンおよび政府は、明らかにアメ公になつており、子犬のように柔順である。さもなければ、アメリカに卑屈にへつらい、いつもその要求に応じるといえることがどうしてあり得ようか。戦争遂行

国のアメリカとイギリスの患者輸送機の領空通過権、その実中立侵害のケースもそうであるし、スイスの銀行とスイス・コンツェルンがアメリカ人に何十億ドルという大金を、例のアメリカのもぐりの弁護士ファーガンの策謀によって搾り取られたことに関してそうである。そして今再びイラク国民と暴君サダム・フセインの金で同じことが起きている。自国にあるスイス銀行とアメリカに預けてある彼らの金を差し出すよう、泣き虫の戦争犯罪者ジョージ W. ブッシュ・ベイビーとその一味は銀行に要求しているのである。そしてこのイラク人の金について言えば、つまりはそれがアメリカの極悪人たちとその猟犬によって、さらにイラクに戦争を仕掛けるために使われるというのは自明であろう。

アメリカは、国連の義務も、国際武力紛争に関するジュネーブ協定も守らない戦争遂行国である。同じことは多くのアメリカ軍兵士にも言える。彼らは、かつてベトナムでやったように、臆病な不安と憎しみや復讐からイラクで民間のターゲットを爆撃し、女性や子供や男性の民間人を冷酷に撃ち殺しているのだ。このようにアメリカは悲惨なイラクでも、すべての紛争当事国が、戦争下にある国で民間人が飢えや乾きや医薬品の欠乏に苦しまないですむように、人道的援助に対して全面的に責任を追わなければならないという、ジュネーブで決議された義務を相も変わらず果たしていない。この点に関してはおよそ人間の記憶の中で、アメリカとその臆病な統治者や支持者や兵士ほどひどい国はなかった。イラク戦争もしくは第二次湾岸戦争で振り落とされたハンマーを今度は別の形で振りかざし、アメリカは厚顔にも自分たちに好意的な国家に財政支援を「せがみ」、人道的援助と、アメ公とイギリス人の爆撃で破壊されたイラクの復興の責任を負わせようとしている。この場合にも腐敗が横行し、アメリカの犯罪的な政権に賄賂などが提供される。それによって罪あるアメリカ人たちは安楽な生活を送り、政権の座にとどまることができるのだ。残念ながらこのような「提供者」の中には、愚かで親米的なスイス人（2003年3月29日付のブリック紙の記事「ブッシュ献金」参照）も含まれている。彼らはそれによってアメリカ人から何らかの利益や利点を期待しているのだ。なぜならば、アメリカでは金が統治しているからだ。本号に先立つ4つの特別公報で私が指摘したように、アメリカはイラク全土とその石油を、そして全世界をも奪い取り、自分の支配下に置こうとしており、これは今や公然たる事実となっている。そしてまたジョージ・ヘルベルト・ウォーカー・ブッシュ・パパのできの悪い息子ブッシュ・ベイビー・ジョージ・ウォーカーが、アメ公によって破壊されたイラクで「平和の果実」を摘み取ろうとしているのも公然である。そのやり方は、破壊された国にいる自分の「友人」に戦後の復興事業を斡旋し、その見返りに確実に莫大な報酬を受け取るというものである（2003年3月29日付のブリック紙の記事「彼らはもう戦後の金儲けをねらっている」参照）。

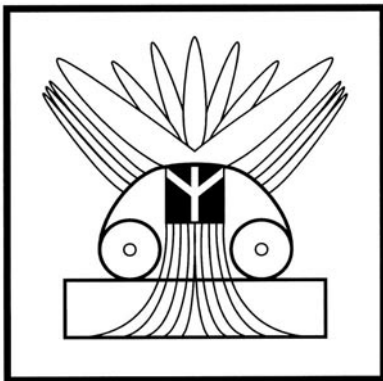
さて、世界中で何十万という人間がイラク戦争に反対して平和デモを行っているが、これは地球上では前世紀から普通のことになっている。平和を求め、戦争を呪う人間によって行われるデモンストレーション。その限りでは結構であるが、こうした平和デモも無意味な受け身の企てである。というのは、国の指導部の犯罪的で戦争扇動的な責任者たちは、その独善と自己神格化から、そんなものには全然関心を持たないからである。全く反対に彼らは、平和を求める者たちの努力を陰険かつ非情にもあざ笑い、さらに自分たちの残忍で犯罪的な行為に耽るようたきつけられたかのように感じるのである。

本当に平和デモが有益であり得るのは、全人類が、あるいは少なくともその大部分が一致団結して、人類に戦争と死と破壊、困窮と悲惨をもたらす罪ある国家権力者たちを追い払う場合のみである。地球の全人類はこの道に行くほかはない。罪ある権力者たち、たとえば国民によって定め与えられた権限を逸脱し、独善的にも生と死を決定する国家運営者とその支持者、裁判官、宗教家および軍隊は、国民の手で解任されて終身追放されねばならない。それも、人類に対して二度といかなる権力も行使することができないという前提条件を満たしている場所に。

さらに、平和運動家の「平和のシンボル」について。平和運動家たちは、次のような平和を象徴するというシンボルを使っている。



このシンボルは極めて古く、1本の樹木を表し、その頂きは地球、すなわち純粋に物質的なものに根を張っている。それは決して意識の力を発達させずに本能だけを発達させ、したがって本来あるべきものとはまさに反対のもの、すなわち戦争を具現化しているのである。なぜならば、このシンボルは太古には慣用的な戦争のシンボルだったからである。それゆえ平和行進でこのシンボルを使用したり、掲げたりすると、平和ではなく戦争を求めて叫ぶことになる。これはもちろん潜在意識の中で強制的にその効果をもたらし、迫りくるあらゆる戦争をいよいよもってたきつけるのである。なぜならば、このシンボルは不和、不自由、憎しみ、不調和、あつれき軋轢および不均衡を伝えるからである。



実際に太古より存在する平和のシンボルは正反対の形でデザインされており、これも一本の樹木を象徴しているが、その頂きは天、すなわち意識の領域に達している。そこでは思考が現れ、そこから感情が発現し、それらの感情によって進歩、進化、知識、愛および知恵、そして平和と自由が創り出される。このシンボルを使用すると、戦争のシンボルとは反対に、その潜在意識の効果を平和、自由、愛、喜び、均衡および調和の形でもたらす。

テロと戦争を要求する権力者、テロリスト、国家権力者、軍隊およびこれらに犬のように媚へつらう愚かな、あるいは同様に権力欲に駆られた同調者たちは、彼らの病的にいかれた思考、要求および言葉によって国民をけしかけて扇動し、呪縛じゅばくする。これは彼らがあらゆる明瞭な思考を欠き、自分たちに催眠状態で心理的に強い影響を与える殺し屋どもの残忍な意図に応じて狂信的になるまで続けられる。このときあらゆる明瞭な思考が失われ、自分が人間を殺すなどと考えたこともない単純な人間が、憎しみに満ち、復讐を求め、報復欲に駆られた殺人者や死刑賛同者になる。ここでは平和は、戦争、殺戮、殺害および破壊によって、自由と平和を創ると称して濫用らんようされる決まり文句にすぎない。現代の地球人は、なんと落ちぶれたことか。地球人は憎しみと復讐欲と無分別に満ち、隣人の財産と土地と生命に対する欲望に溢れている。今日の人類の大部分は完全に変節し、人間を蔑視した犯罪的で下賤な輩やからに影響されている。これらの輩は、ひとえに自分が富み、人類を困窮と悲惨に転落させるために権力を利用する。

我々の世界や地球人類はどうなったのか。我々の遠い先祖、たとえば約300万年前、およそ20万世代前のアウストラロピテクスは平和な生き物であった。ダーウィンの嘘によると、これらの生き物が、人間は戦闘的な猿に由来したことになっており、非論理的で偏狭な科学者は今日なおそう主張しているが、その反対

にアウストラロピテクスは初期段階における本当の人間だったのであり、平和に関して明らかに現代の人間におけるよりはるかに多くの理解力を持っていた。アウストラロピテクスは、今日の人間のように群れて生活しており、たとえ自分の種族や、まさに群れの支配権をめぐる戦ったとしても、戦争はしなかったのである。しかしこれらの戦いは、生命の尊重と（アウストラロピテクスはすでにより高次の本能的、半意識的な思考と感情を持っていた）、肉体的な無傷を志向する、ある種の文化を持っていた。したがって、アウストラロピテクスは支配権維持などの目的で、身体を傷つけたり、さらには相手を殺してしまうなどの戦いはしなかった。それゆえ、歯をむきだしたり、野蛮な威嚇^{いかく}の身振りをしたりする模擬戦のみを行った。

さて、国家権力者に対して、一般的には政府に対して、普通の市民が自己防衛し、自分たちの論理的な意見を押し通す可能性はほとんどない。テロリストや宗教に対しても同様であり、これらは一般的な観点で言えば市民の意見を認めず、また特別な観点で言うと真実を認めようとしなない。正直な意見や本当の真実を語ることは忌み嫌われており、それが犯罪的な国家権力者、罪ある坊主、新興宗教のグル、腐敗した経済ボス、あるいは罪ある軍隊に関するものであるかどうかは全然重要ではない。普通の市民は、彼らの不正な、それどころか犯罪的な策謀に敢えて反対する発言をするか、あるいは犯された間違いを指摘するだけでも、最悪の場合には殺害を覚悟しなければならない。それは私の身にすでに20回も起きたが、それは私が公然と、誤解の余地なく、自由に本当の真実を広める努力をしているからである。同じことが再び起こるかもしれない。なぜならば、私は特別公報でも歯に衣着せず、自分の口を封じさせることはしなかったからである。あまり重要でない場合には、率直に意見と真実を語る者は沈黙させるために圧力が掛けられる。この場合圧力は物質的な加害から、心理テロ、卑劣な中傷に及ぶ。最も軽い場合には普通の市民は単に裁判所に呼ばれ、その発言と表明が完全に真実であり正当であるにもかかわらず有罪の判決が下される。それはすでに新興宗教のグルに関する件で私の身に起きたことでもある。そして私は無知な者に私の言葉により、そしてまた私の特別公報により、真実の本当の事実を知らせることを義務と感じているので、私はおそらく再びいろいろな側から、あれやこれやのことを覚悟しなければならない。その背後には宗教勢力や秘密諜報機関も、しかしまた宗教家、軍隊、新興宗教家、経済犯罪者、知ったかぶり、病的な批判者およびテロリストも潜んでいることは疑問の余地がないのだ。こうした全体から見て私の誤解でないならば、私が自分の言葉を鍛えてきた金床にハンマーが打ち込まれるのは時間と機会の問題にすぎないであろう。

ビリー

FIGU 特別公報 第9巻第5号 (2003年4月) 速報版 無料
FIGU-SONDER-BULLETTIN, 9.Jahrgang, Nr.5, April. 2003

発行日 2003年7月1日 ©

監訳 フィグ・ヤーパン

翻訳 明瀬 一裕

発行 フィグ・ヤーパン (FIGU-JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野 3-11-2-305

電話 0426 (35) 3741

FAX 0426 (37) 1524

URL <http://jp.figu.org/>E-mail jp@figu.org

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複写複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。